６－１１

主題	褥瘡ケアにおける心理、社会的状態の改善による相乗効果
副題	褥瘡完治が QOL を向上させた

キーワード１	相乗効果	キーワード２	生きる意欲	研究(実践)期間	12 ヶ月

法人名	社福）三交会	事業所名	青葉台さくら苑
発表者（職種）	田中久仁彦（リーダー）、新田正伸（介護課長）		
共同研究(実践)者	目黒悠璃香（サブリーダー）、緑川洋礼（看護課長）、島倉ひとみ（栄養士）		

電　話	０３―３７９１―３５０３	ＦＡＸ	０３―３７９１―３５０４

事業所紹介	当施設は、特別養護老人ホーム、ショートステイをはじめとする計 5 つの事業を運営しております。目黒区の目黒川沿いに位置し、周辺は桜並木で有名です。また、働きやすい職場環境の整備にも力を注ぎ、スタッフ一同が質の高いケアを提供することを目指しております。感染症対策の緩和を受け、地域貢献や交流活動にも積極的に取り組んでいます。

《1．　研究(実践)前の状況と課題》

令和５年度の特養新規入所者は 50 名おり、平均要介護度は 4.18 であった。入所経路は、病院からが約 30%、自宅からが約 50%となっている。注目すべき点は、自宅において適切な介護が受けられない状態での入所者が５名存在したことである。その内訳は、褥瘡発生による在宅生活の困難が３件、介護者からの虐待が２件と、深刻な状況が明らかになった。

独居や高齢者のみ世帯の増加に伴い、適切な介護を受けられない状態での入所が増加する傾向にある。褥瘡発生は、身体的・精神的な苦痛を伴うケースが顕著である。この問題は、高齢者の QOL を著しく損なうものであり、早急な対策が求められる。

Ａさん（68 歳）は要介護状態の母親と２人暮らし。2023 年１月にてんかん、パーキンソン病、進行性核上麻痺と診断された。その後、寝たきり状態となった。同年７月には仙骨部に大きな褥瘡を発生させ、治療のため入院した。入院先の環境に馴染めず、生きる意欲の低下や食欲不振など、心身の状態が悪化した。同年 11 月、Ａさんの馴染みのある環境で褥瘡治療と心身回復を図るため、特養へ入所した。ほとんどの日常生活動作で介助が必要な状態であった。

《2．　研究(実践)の目的ならびに仮説》

＜目的＞多職種（介護職員、管理栄養士、看護師、生活相談員、ケアマネージャー）でアプローチし、褥瘡を完治させる。同時に、憂鬱な気分、不安を軽減させ、社会参加、家族との交流の機会を増やし、本人の生きる意欲を向上させる。

＜仮説＞褥瘡の治療には、医療的ケアに加えて、心理・社会的ケアを通じて QOL を向上させることが、より効果を発揮すると考えた。

《3．具体的な取り組みの内容》

・プロジェクトチームを立ち上げ、ケア計画立案。

無断転載・複製を禁じます。

・毎日、声掛けのコミュニケーション。
・ケア提供時のご本人への意思確認と同意。
・本人の趣味であるスポーツ観戦するための環境整備。
・ご家族に協力依頼し、面会を増やす。
・本人の意向に沿う、食事形態や嗜好品を調整。自助具使用による自力摂取の支援。
・褥瘡発生危険要因を数値化した OH スケールによる客観的な評価。
・体圧分散式マットレスの使用、２時間ごとの体位交換の徹底、ポジショニングの統一。
・月２回の皮膚科往診、毎日２回の洗浄・処置、創部写真による観察と評価。
・スキンフレールの改善効果が期待される栄養強化食品の導入。
・褥瘡ケアに特化したパットを使用した排泄ケアへの切り替え。

《４．取り組みの結果》

深さ 2cm、直径 4cm の潰瘍であった仙骨部の褥瘡は、取り組みにより、令和６年５月頃から肉芽組織の増殖が認められ、創部が縮小した。７月にはほぼ肉芽組織で充填され、８月には上皮化を認め、処置を終了した。褥瘡治療のために１年２か月留置されていた膀胱留置カテーテルが本人の希望により外れた。現在は自己排尿が可能となった。

入所当初は、パーキンソン症候群による「仮面様顔貌」が目立ち、ほとんど発語がなかった。しかし、支援の結果、現在は笑顔で家族と会話している。クラブ活動、行事にも積極的に参加するようになった。ご本人からは、リハビリへの意欲が表明され、「歩けるようになりたい」と積極的に目標を立てている。

自分の手で食べたいという意欲が向上し、一部介助から自立となった。食事形態はご本人の「常食が食べたい」という強い意欲に応え、おやつだけは常食に変更された。以前は人前に出ることを嫌がる様子が見られたが、現在は、食堂で他の利用者と一緒に食事をとるなど、食事の楽しみが増えている。

《５．考察、まとめ》

心理社会的アプローチで、ご本人の内在化していた生きる意欲を顕在化させることができた。適切な褥瘡ケアとご本人の生きる意欲を高めることで生まれる相乗効果で褥瘡を完治させることができた。褥瘡の完治はもちろん、A さんの笑顔や会話の増加、リハビリへの意欲向上など、心理・社会的状態の著しい改善が見られた。褥瘡治療だけでなく、心理・社会的ケアが複合的に行われたことによる相乗効果が考えられる。

《６．倫理的配慮に関する事項》

本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《７．参考文献》

褥瘡予防・管理ガイドライン第５版（日本褥瘡学会）
こころの危機への心理学的アプローチ　個人・コミュニティ・社会の観点から（窪田　由紀）

《８．提案と発信》

本研究を通じ、褥瘡ケアは、医療的ケアだけではなく、心理・社会的状態の改善が重要であることが明らかになった。医療的ケアと心理・社会的状態改善の相乗効果を裏付けるエビデンスを蓄積していくことが必要である。今後も継続的な実践と評価を通じて、より良いケアを目指していく。

無断転載・複製を禁じます。